

志望専攻別対人関係価値の比較研究

— 短大生の場合 —

平 松 芳 樹

問 題

パーソナリティの研究は、現代心理学における最も新しい領域のひとつであり、様々の角度からアプローチされている。最近、人間関係ないし対人関係における価値観に着目してパーソナリティを理解しようとする多くの研究があるが、Gordon (1960) は対人関係価値を測定するためのスケールすなわち S I V (Survey of Interpersonal Value) を構成し、この立場から多くの資料を提供している。

S I V は、特に比較文化的な観点からの資料が多い (Gordon 1963, 1967. Gordon & Kikuchi 1966. Kikuchi & Gordon 1966)。本邦では菊池 (1963) により紹介され、日本版尺度の信頼性と妥当性の検定もおこなわれている (菊池1963, 1964a, 1964b)。更に大羽 (1969, 1971) によりパーソナリティの地域性についての広範囲な研究がなされ、S I V が比較文化的研究と同じく、地域性の理解に対しても有用であることを実証している。

本研究では、菊池 (1963)、大羽 (1969) に示唆されているように、専攻学科による価値観の相違が S I V 得点のちがいとしてあらわれるようであるということに着目し、短大生の場合の比較研究が試みられた。

手続と方法

パーソナリティを理解する考え方には Allport (1961) が試みたように、特性 (trait) によってそのプロフィールを作ろうとする立場と、個人のもっている基礎的な動機づけの型 (motivational pattern) すなわち価値によって記述しようとする立場とに大別できる。Gordon は後者の立場をとり、対人関係において各個人が自らの重要と考えていること、すなわち価値観を基礎にして自分の行動を律しているのであるとする。彼は様々の対人関係での価値領域の中から6つの因子をとりあげ、それを測定するスケールを作成した。

この小論では、そのスケールの日本版である KG-S I V (菊池・ゴードン対人関係価値尺度) を使用した。6因子は、支持 (support)、同調 (conformity)、承認 (recognition)、独立 (independence)、博愛 (benevolence) および指導 (leadership) である。それぞれの価値の意味とその価値領域に属するステートメントの例をあげると次のようである。尚、結果と考察以降では英語の頭文字をその略号として用いることが多い。

1. 支持(S):他の人々から理解をもって扱われ、勇気づけられる。親切や思いやりをもって扱われる。

(例)他人が私のすることに同意してくれる。人々が自分の味方であることを知る。

2. 同調(C):きちんと規則に従い、社会的に当を得た行動をする。他の人々から受け入れられる妥当な行動をする。

(例)規則や規定をきちんと守る。みんなが受け入れてくれるようごくあたりまえに行動する。

3. 承認(R):他の人々から尊敬され、賞讃され、重要な存在として考えられる。他の人々の好ましい注意をひき、承認をうける。

(例)他の人々が私のことに注目する。人々から重要な人物として認められる。

4. 独立(I):自分の思うよう行動する権利をもつ。自分自身の決定を自由にする。自分独自のやり方で行動できる。

(例)自分の思うままに自由である。他人から命令されない立場にたつ。

5. 博愛(B):他の人々のためになることをする。共に分けあい不幸な人々に助力の手をさしのべ、寛大である。

(例)不幸な人々と友人になってあげる。みんなに心から親切にしてあげる。

6. 指導(L):他の人々の行動に責任をもつ。他の人々の上に立つ。リーダーとしての位置につく。

(例)重要な仕事をしたり、大切な役についたりする。集団でものごとを決めるばあいその議論をリードする。

さて、これらのステートメントは、たとえば、

- 自分の思うままに自由にやれる
- 他人が私のことに同意してくれる
- 不幸な人々と友人になってあげる

のように3つずつ組になっており、この中から自分自身にとって「もっとも重要と考えるもの」と「より重要でないと考えもの」を選択するようになっていて、強制選択法の形式をとっている。このような組が30組すなわち90のステートメントからなるが、それぞれの組はいわゆる「社会的望ましき」が等価になるように考案され、被調査者の反応が、社会通念のような一般的基準によってなされることを避け、被調査者自身における重要さの基準からなされるように工夫されている。

短大生の資料は、中国短期大学の学生のうちより集計された。主として1年生で、各科にわたっている。内訳は、保育科75名、音楽科56名、家政科34名および英文科24名(いずれも1年生)で、殆んどは18~19歳の女子学生であるが、音楽科には2名の男子学生を含む。また保育科2年生33名の資料も集録したが、これは保育科については、対人関係価値の発達についても比較するためである。いずれも1971年12月に調査し、計222名の有効資料が集められた。但し、科別比較の際、音楽科の男子2名分は後に述べる理由から、一応除外してある。尚、岡山大学の太田教授の御好意により、1971年5月調査の中国短期大学家政科の資料105名分(主に栄養課程2年生で、家政専修1年生が含まれる)を比較資料として提供していただいたので適宜使用する。

結果と考察

専攻学科別の S I V 得点平均と標準偏差を Table 1 に示す。

Table 1 専攻学科別 S I V 得点平均と S D

学 科	n		S	C	R	I	B	L
保 育	75	M	16.49	17.57	8.43	17.11	19.33	11.07
		S D	(3.99)	(3.92)	(3.11)	(4.70)	(4.16)	(3.74)
音 楽	54	M	16.09	18.43	9.81	17.19	17.33	11.15
		S D	(4.24)	(4.10)	(3.64)	(6.11)	(5.23)	(4.42)
家 政	34	M	16.09	18.24	9.59	16.91	17.03	12.15
		S D	(4.69)	(4.41)	(3.59)	(5.76)	(5.45)	(3.82)
英 文	24	M	15.92	17.96	9.54	16.54	18.88	11.17
		S D	(4.55)	(4.35)	(3.88)	(4.96)	(5.37)	(3.58)
家 政 (主に栄・2)	105	M	16.42	18.31	9.16	17.06	17.50	11.36
		S D	(3.90)	(4.79)	(3.26)	(4.97)	(4.63)	(4.05)

まず保育科において一番に目につくのは B (博愛) の得点が他の科より高いことである。音楽科より有意に高く ($t=2.398$, $df=127$, <0.02)、家政科よりも有意に高い ($t=2.398$, $df=107$, <0.02)。また栄養課程 2 年生を主体とする家政科よりも有意に高い ($t=2.711$, $df=178$, <0.01)。英文科とは有意ではないがやや高い (<0.2)。今ひとつには、R (承認) について、音楽科より有意に低く ($t=2.296$, $df=129$, <0.05)、その他の科とは有意ではないがかなり低い傾向にある〔家政 (<0.1)、英文 (<0.2)〕ことである。

これらは保育科の学生が、博愛すなわち他の人々のためになることをし、みんなに親切にすることなどを重要視して、承認すなわち他人の注意を引いたり、注目を浴びることなどにはあまりかまわない傾向があることを示している。これを一口に言えば、ひかえ目で奉仕的という「保母」のイメージに近いといえそうである。

次に、音楽科と家政科および英文科相互間には、保育科にみられるような際立った差異は殆んどみられない。ただ、音楽科で R (承認) がやや高いようである位にすぎない。すなわち他の人々の賞讃を受け、好ましい注意を引くことを重くみる傾向が多少みられる。(保育科より有意に高い。)

次に、保育科には他の学科と差があるので、2 年生の資料をも加味して検討してみる。その前に 1 年生と 2 年生との相違を明らかにしておく必要があるので、この比較を Table 2 に示す。

Table 2 保育科1年及び2年の学生のS I V得点平均と標準偏差および差の検定

	n		S	C	R	I	B	L
保育1年	75	M	16.49	17.57	8.43	17.11	19.33	11.07
		S D	(3.99)	(3.92)	(3.11)	(4.70)	(4.16)	(3.74)
保育2年	33	M	16.15	19.82	8.06	16.67	18.18	11.12
		S D	(4.20)	(3.36)	(3.28)	(4.58)	(4.98)	(4.68)
差			0.34	-2.25	0.37	0.44	1.15	-0.05
有意水準			ns	0.01	ns	ns	ns(0.3)	ns

この表は、保育科における対人関係価値の発達の現状を示すものと理解される。

2年生は1年生にくらべると、C得点において有意に高く、B得点では有意ではないが低くなる傾向がみられた。これは「社会的にみとめられた慣習に従って行為しようとする」ようになり、「不幸な人々、困っている人々に助力の手をさしのべ、寛大である」ことを重要視する割合が減ってくるという変化がみられる。言葉を換えれば、1年生ではまだ理想主義的であるが、2年生になり、しかも実社会への門出も近くなった時点(12月)では、すでに施設や保育園あるいは幼稚園の見学・実習と経験を積んでおり、現実をみつめる機会も多く、しだいに現実のきびしさを感じてきているためと考えられる。特にB得点の減少についてはGordon & Mensh (1962)が医学部学生の対人関係価値の学年変化において認めており、医学部学生の価値観が理想主義的な傾向からシニクな傾向へと変化することを考察している。また大羽および平松(1971)も岡山県の中学生・高校生の対人関係価値の発達の中でB得点の減少を認めている。C得点の増加はGordon (1963)のあげているstudent nurseとregisterd nurseの比較においてもみられるので、Table 3に示しておく。

Table 3 Means and Standard Deviations for Student Nurses and Registered Nurses (Gordon 1963から再構成)

	n		S	C	R	I	B	L
Student nurses	50	M	16.2	16.9	9.9	15.8	20.4	10.8
		S D	(4.9)	(5.4)	(3.8)	(5.2)	(4.3)	(6.3)
Registered nurses	50	M	16.1	19.3	8.3	15.9	19.9	10.1
		S D	(5.1)	(5.3)	(3.8)	(6.1)	(4.6)	(6.9)
Difference			0.1	-2.4	1.6	-0.1	0.5	0.7
Significance			ns	0.05	0.05	ns	ns	ns

Table 2とTable 3とを比較すれば、日本とアメリカの対人関係価値の相違についても考察できるのであるが、ここでは結果のみ報告するにとどめる。それは日本(保育科)の

方がアメリカ (student nurse) より R 得点で低く、片側検定がとれるなら B 得点でも低く、C 得点で高いことが認められる。尚、日米の差についてつけ加えるなら、菊池(1963)の調査によると、わが国の資料の方が、R, L 得点で低く、C 得点で高い傾向を認めてこれを「自らを目立たぬ存在としようとする傾向」と推論している。また大羽 (1969) が岡山県公衆衛生看護学校の学生の資料を Table 3 の資料と比較させた結果では、岡山の学生が B 得点で低く、I 得点で高いことを指摘している。

それでは、保育科 1 年と 2 年を合計して保育科全体の傾向をながめることとし、それをその他の学科 (音楽・家政・英文) 合計と比較して検討する (Table 4)。

尚菊池 (1963) は福島県立保母学院生徒と福島大学学芸学部女子学生とを比較して、保母学院生徒は B, L 得点で高く、S, I 得点で低いことを指摘しているので、その結果を Table 5 に示しておく。更に Gordon (1963) が student nurse と female student との比較から、B 得点で高く、S, R, I 得点で低いことを認めているので Table 6 に呈示する。

Table 4 保育科 (1・2年合計) 学生とその他学科学生の S I V 得点平均と S D

		n		S	C	R	I	B	L
保育科 合計	108	M		16.39	18.26	8.31	16.97	18.98	11.08
		S D		(4.05)	(3.89)	(3.18)	(4.69)	(4.44)	(4.07)
その他学科 合計	112	M		16.05	18.27	9.69	16.96	17.57	11.46
		S D		(4.46)	(4.26)	(3.67)	(5.80)	(5.37)	(4.09)
差				0.34	-0.01	-1.38	0.01	1.41	-0.38
有意水準				ns	ns	0.01	ns	0.05	ns

Table 5 福島の保母学院生徒と学芸学部女子学生

(菊池1963による)

		n		S	C	R	I	B	L
保母学院 生徒	45	M		14.5	19.7	7.6	16.0	19.8	12.7
		S D		(3.9)	(3.0)	(2.9)	(4.2)	(4.2)	(3.8)
学芸学部 女子学生	196	M		16.7	18.8	7.8	18.5	17.4	10.7
		S D		(4.3)	(3.0)	(3.4)	(4.9)	(4.8)	(4.0)
差				-2.2	0.9	-0.2	-2.5	2.4	1.9
有意水準				0.01	ns	ns	0.01	0.01	0.01

Table 6 Means and Standard Deviations for Student Nurses and Female Students

(Gordon 1963による)

	n		S	C	R	I	B	L
Student nurses	123	M	16.8	14.5	10.9	14.7	21.6	11.4
		S D	(3.8)	(5.7)	(4.4)	(5.3)	(4.9)	(5.2)
College students	746	M	17.8	14.2	12.1	16.2	18.4	11.4
		S D	(4.9)	(6.2)	(4.9)	(6.6)	(5.7)	(6.5)
Difference			-1.0	0.3	-1.2	-1.5	3.2	0.0
Significance			0.05	ns	0.01	0.05	0.01	ns

岡山の短大の資料では、保育科は他の学科よりB得点が高く、R得点が低いという結果が出たが、これは最初に見た傾向がさらにはっきりあらわれている。自分を認めてもらったり、他人から重要視されること(承認)をきらい、みんなに親切にしてあげたり他人のためになることをし、他人に助力すること(博愛)を重くみている。この傾向は、福島あるいはアメリカの結果とも類似している。ただここでもTable 4とTable 5あるいはTable 6と比較する時点では、対人関係価値の地域性あるいは比較文化の観点からの考察が要求されるのであるが、なおかつ相対的類似があることは、文化や地域性の相違よりも、専攻さらには職業的地位による差異の方が強くあらわれるのではなかろうかと思える。

これに関連して、今回の短大生の全資料を集計してみることは、その学生気質をも推察しうる材料となりいわゆる校風とか学風の理解に役立つものと考えられる。しかしながら女子学生中心の主として1年生でしかも保育科にかたよった資料であるから、条件を統制して再検討する必要がある。尚「手続と方法」で触れた音楽科男子2名を除外した理由は、男女差を考慮してのことである。性差について、Gordon (1960)の標準化資料によれば、R(承認)には有意差はないが、男性はI(独立)、L(指導)が高く、女性はS(支持)、C(同調)、B(博愛)で高いことを見出している。菊池(1963, 1964a)による福島、岐阜あるいは東京も加えた東日本の資料では両性の差は少なく、男性はL(指導)において高く、女性はS(支持)において高く、B(博愛)で若干高くなることが認められている。したがって女性の特徴は「他の人々から理解をもって扱われ、勇気づけられ、親切や思いやりをもって扱われる」(支持)ことを望み、「他の人々の上に立ったり、リーダーの位置についたりする」(指導)ことを重要視しないこと、つまり受身的で内向的傾向があるといえよう。

これらの理由から、ここには全資料の総合計(音楽科の男子および1971年5月の資料を含む)のS I V得点平均と標準偏差を紹介するだけにしておく(Table 7)。

Table 7 総合資料のS I V得点平均とS D

n		S	C	R	I	B	L
327	M	16.28	18.29	9.06	16.99	18.01	11.31
	S D	(4.16)	(4.32)	(3.41)	(5.19)	(4.86)	(4.94)

要 約

本研究は、志望専攻による対人関係における価値観の相違がS I V得点のちがいであらわれるかどうかを、短大生の場合について検討したものである。

結果を要約すればつぎのとおりである。

専攻学科別の差異としては、保育科においてB得点が高く、R得点が低いことが顕著である。すなわちみんなに親切で、他人のためになることをする(博愛)が、他人の注目を浴び、認められること(承認)は低くみている。しかも保育科の1年生と2年生では、その間に習得あるいは体制化が進んだものと考えられる発達的变化がみられる。すなわちB(博愛)得点の減少傾向と、C(同調)得点の増加である。

その他の学科(音楽、家政、英文)においては、音楽科のR(承認)得点が高い傾向にある以外は比較的類似傾向を示している。

最後に、GordonはS I Vの適用として、選抜や評価または職業指導、カウンセリング、あるいは仕事への満足度とか結婚生活での適応関係といった研究調査として用いようとしているのであるが、実際このS I Vを実施してみると、その有用性が理解できる。まず実施は短時間(約20分)で可能という利点がある他、被調査者においては自己洞察の機会が与えられ、人間関係のあり方を考える上でも役立つであろう。また採点した原資料を見れば、平均から極端にはずれた者には、個別に面接してつっ込んで聞いてみることもできる。更に個別的に限らず集団的に教育効果の測定にも有用であろうと考えられる。

○本研究の実施にあたり、適切な指導と助言を頂いた岡山大の大羽教授にお礼申し上げます。

文 献

- Gordon, L. V. Manual for Survey of Interpersonal Values. Science Research Associates, 1960.
- Gordon, L. V. Research briefs on Survey of Interpersonal Values. Science Research Associates, 1963.
- Gordon, L. V. Q-typing of oriental and American Youth: initial and clarifying studies. J. soc. Psychol., 1967, 71, 185—195.
- Gordon, L. V. & Kikuchi, A. American personality tests in cross-cultural research - a caution. J. soc. Psychol., 1966, 69, 179—183.
- Kikuch, A. & Gordon, L. V. Evaluation and cross-cultural application of a Japanese form of the survey of interpersonal values. J. soc. Psychol., 1966, 69, 185—195.

- 菊池章夫 対人関係価値の測定(1). 福島大学学芸学部論集, 1963, 8—14.
- 菊池章夫 日本人の対人関係観—Gordon, L. V. のSIV資料を中心にして—年報社会心理学第5号, 勁草書房, 1964a, 161—177.
- 菊池章夫 対人関係価値の測定(4). 福島大学学芸学部論集, 1964b, 36—41.
- 大羽 葵 対人関係価値の地域性—K G - S I Vによる比較の試み—, 年報社会心理学 (現代の人間関係の社会心理学), 1969, 219—232.
- 大羽 葵 瀬戸圏における住民のパーソナリティの地域性に関する心理学的研究, 山陽放送学術文化財団リポート第13号, 1971, 20—25.
- Allport, G. W. *Pattern and Growth in Personality*. New York: Holt, Rinehart and Winston, 1961 (今田監訳 誠信書房 1968).
- Gordon, L. V. & Mensh, I. N. Values of medical school students at different levels of training. *J. educ. Psychol.*, 53 (1962), 48—51.
- 大羽葵および平松芳樹 対人関係価値の発達と地域性. 中国四国・九州心理学会連合第四回大会論文集, 1971.